ロッジがあるモンの村

インドシナ戦争はベトナム、ラオス、カンボジアを戦場とした第二次世界大戦後の最も悲惨な長期の戦争だったと言われる。

一九七五年四月、南ベトナムの首都サイゴンが陥落し、共産軍勝利で戦争は終結した。

この戦争でアメリカは最も多い時で兵士五十万人を送り込んだが、アメリカが撤退するとラオスに住んでアメリカに協力したモン族は居場所を失い、たくさんの難民が隣国タイに流れ込んだ。

タイ北部の山岳地帯に住むようになったモン族とタイ政府軍が衝突し、双方にかなりの死者が出た。タイ政府は彼らが共産ゲリラ化するのを恐れて低地定住政策を打ち出し、かなりのモン族が山を降りた。

しかし今もたくさんの人が山岳地帯で生活している。山のモンとの友好政策の一つとしてタイ国王はモンの村にロッジを建設し、運営をモンの人たちにまかせている。

北部のパヤオ県で最も高い、海抜千七百五十メートルのプーランカ山を目の前に仰ぐナムカー村もその一つ。

五十世帯、約三百人が住むこの村には五棟のキャンプロッジが建っており、そこに三泊した。

低地は水稲だが、山は陸稲。米のほかにトウモロコシやキャベツを栽培している。ほとんどの家で、豚と鶏を飼っている。

ロッジを訪れて一番驚いたのは、昨年七月から八月にかけての大雨で、山の畑が大きな被害を受けていたことである。

目の前のプーランカ山の頂上付近にもがけ崩れの跡があり、中腹には縦にくぼみが何カ所もできている。大量の土砂が流れ出て、開墾した畑は大きな被害を受けている。

山とナムカー村の間を流れる川の位置も変わり、これは彼らがここに住んで以来初めてのことだという。

山のロッジはそれほど利用されているようには見えない。近くにはタイの観光マップにも出ている景勝プー・チー・ファー（ラオス国境の断がい絶壁の名勝で、山頂からメコン川やラオスの壮大な景観が見える）もあるのだから、雨でも普通の車で通れるように山道を簡易舗装できないか。

近代化からとり残され、山の中で細々と農業を営むモンの人たちが近代化がもたらした二酸化炭素増大に伴う異常気象の影響で大きな被害を受けている現実に、何ともやりきれない気持ちになった。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

タイ国王が建てたロッジ

大雨の時に作られた仮橋

洪水で無残に流された畑